

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, July 15th, 1950. —No. 233

関西大學學報

第 2 3 3 號

昭和 2 5 年 7 月



グラウンドの一角よりクラブハウスを望む、右端は本館の一部

關西大學學報局

就任の辭

学長 岡野留次郎

今回図らずも不肖の身をもちまして本学々長の重責にあたることになりました。つきましては一言所信を述べ就任の辭に代へたいと存じます。

今や世界の客観的情勢は誠に重大であります。人類の平和と文化は恐るべき擾亂と破壊の前に戦慄し、歴史は新しい変革への胎動を経験しつつあるもののようにあります。かやうな歴史の変革期に際しましては、人は屢々理性の光を見失ひ、盲目的な衝動力に圧倒され勝ちであり、人間存在の本質と價值について深くして廣い反省と展望とを持つことを往々にして困難にされる傾があります。その結果、人は理想に対する幻滅と現実とに体験する惨害とにうちめざれ、虚無の深淵に絶望の苦惱を味はひ、或は單純化された理論の簡明さに魅惑され、社会悪に対する革命的意欲の向ふまゝに、非合法的な革命運動にかりたてられ易いのであります。かやうな危局に直面して大学は果していかに在るべきでありませうか。これは容易ならぬ問題であります。しかし私は今この問題



岡野留次郎

について詳しく論ずる余裕をもちませんのでこゝでは單に現下わが國の大学の在り方についてその一般的理念に關し、簡單に一言するに止めたいと思ふのであります。

大学は最高の学府といたしまして、一方、学一般の水準を高める機能を果すべきでありませうが、他方、人間の一般的教育水準の向上をはかることによつて、人間存在の本質と價值とについでの自覚を高めることにつとめなければならぬと信じます。このことはい

つ時代に於ても大学に対して課せられた一般的任務と思はれるのであります。現在のやうな情勢下に於ては、特に強く高調されなければならない大学の使命であると信ぜられるのであります。何故なら、この使命が達成されることによつて初めて人間は理性の光を取り戻し、自己存在の本質と價值との自覚にめざめ、高度の知性と磨かれた人格とに導かれた極めて妥当な方法によつて、人類の永遠の平和と福祉とを実現する可能性への道を拓き得るからであります。ところでこの大学の使命を遂行するための重要な條件は、從來屢々論議された「大学の自由」「大学の自治」であることは申すまでもないことと思はれます。只この大学の自由或は自治なるものが具体的には何を意味するかといふことが、なかなか問題であらうと思ひます。すべて歴史的社会的現実においては、如何なる尊象といへども、絶対的な意味において自由と呼ばれ得るものは何一つあり得ないのでありますから、大学は自由でなければならぬと云つても絶対的な意味においてでないことは云ふまでもありません。われわれは、只大学に於ては、前に述べた大学に課せられた一般的な任務を遂行する上において教へるものも学ぶものも、共にその個性の自由と人格の尊嚴が、可能なる限り最大限度に於て保障せられなければならないと思ふのであります。それ故、もし何等かの外的政治的權威による圧迫がこの自由を脅かす場合には、われわれは立つて敢然と争ひ、学園における研究の自由を護らなければなりません。しかしまだ同時に、一つの偏向したイデオロギーのもとに暴力的圧迫行爲を以てこの自由を危くするものがありますならば、われわれはまたこれとも立つて戦はなければならぬ。要は最高学府としての大学においては一方それぞれ専門の学徒は、眞理の把握を目指して全く自由な信念と方法に即して、限りなき学の追求が、自由且つ眞摯に遂行されなければならないと同時に、また他方に於て、この学の追求の手段を通して社会的にも陶冶された自由な個性の人格が完成せられてゆくのでなければならぬと思ふのであります。

本学は一私学として右に述べた任務遂行に最高の條件を備へて居るとは申せませんが、しかしまた必ずしも最悪の条件下にあるとも云へないと思ひます。私は固より浅学非才、種々の点でこの任務遂行の重責にあたる資格を欠くと思ひますが、只自己の信念と誠意とによつて微力の限りをつくしたい所存であります。

日本經濟の安定過程

經濟學博士
教授

森川太郎

第二三三號 目次

就任の辞	……	学長 岡野留次郎	(表紙)
日本經濟の安定過程	……	森川太郎	(一)
細江逸記先生の學問	……	山本忠雄	(五)
ジャーナリズム三軍観	……	井上吉次郎	(七)
学内報	……		(九)
学長改選	……	臨時協議員会	教育職員免
許法認定講習会	……	夏季語學講習会	……
文學夏季講座	……	学内人事異動	……
寄附保險計畫	……		
生	……		(二)
最終専門部祭	……	陸上競技部	……
……	……	卓球部	……
……	……	水泳部	……
……	……	拳闘部	……
……	……	美術部	……
……	……	写真部	……
……	……	茶道部	……
……	……	新聞學研究部	……
……	……	山岳部	……
友	……		(三)
東京支部再発足	……	福岡支部	……
……	……	滋賀縣同	……
……	……	大会	……
……	……	泉佐野支部結成委員会	……
……	……	西本校	……
友司法試験委員	……		
校友職員名簿抄(一)	……		(三)
竹城植野武雄先生	……	石濱純太郎	(四)
生田文庫の書入本方葉集	……	吉永 登	(五)
「つくる喜びと生きる呪い」	……	杉原四郎	(六)
「戯曲「火山灰」について」	……		(七)
千里山岡書館洋書新着図書一覽(一)	……		(八)
……	……		(九)

敗戦の混亂に引續いて猛威を振つた我國のインフレーションも、過去一年間に於ける安定政策の強行に依つて昨今漸く收束の域に達したようである。云うまでもなくインフレーションの加速度的な進行が行き着くところは國民經濟の破滅の外にはない。其破滅への道の驛進が、昨昭和二十四年に於て大きく安定への方向に切換えられた。敗戦後の日本經濟の進路が此年を轉機として急角度的な方向轉換をなし、復興のゴールに舵を向けた意味に於て、昭和二十四年は永く國民に銘せられてよい年である。

勿論インフレーションから安定への方向轉換は、易々として行われ得たのではない。相当思い切つた安定政策の強行が必要であつた。世にドツヂ政策と称せられる一連の政策が即ちそれである。ドツヂ政策は先づ第一に政府財政の實質的な均衡を要請した。即ち従來政府財政は表面的に一應収支の均衡を保つていたが實質的には赤字財政であり、其赤字が結局日本銀行からの借入金で補われる關係となつて、インフレーションの主要な原因となつていたのである。ところが昨年度はドツヂ氏の指導の下に超均衡予算と呼ばれる實質的に均衡した予算が編成、実行せられた。当初の予算では一般会計だけで七千億円余に上る未曾有の龐大予算

であり(前年度は四千七百億円余)、而も歳入のうち約七二%五千億円余が租稅收入、残りが官業收入及び雑收入から成ると云う黒字予算である(前年度予算に於ける租稅收入は歳入額の約六六%三千百億円余)。昨年度國民にとつて租稅の負担が特に重く感ぜられたのも決して偶然ではない。

安定政策の第二は健全金融政策の實行である。此線に沿つて、従來兎角の問題があつた復興金融庫の貸出は、昨年四月以降停止せられることになり、一般市中銀行の諸産業に対する金融も嚴に生産的用途に用いられるものに限定せられ、所謂赤字金融の如きものは一切行わないことになつた。尙第三に円の爲替比率が四月二十五日から一ドル三六〇円の單一レートに定められたことも、従來の伸縮的な複數レート制に比して、著しく經濟の安定に寄與する効果を有つのである。

勿論此様な安定政策を一挙に実行することは經濟の各部面に種々の摩擦や問題を惹起する。しかしあらゆる障害を排しての政策の強行に依つて、我國の經濟は昨年一年を通じて著しく安定の状態に接近し、インフレーションの進行も殆ど停止するに至つた。其様相を簡單な數字に依つて示すと次の如くである。

(一) 日本銀行券發行高(單位億円)

(昭和二十一年末) (昭和二十二年末) (昭和二十三年末) (昭和二十四年末) (昭和二十五年三月末)

九三三 二、一九一 三、五五二 三、五五三 三、一一三

(二) 物價指數(日銀調、昭和九—一一年平均を1とする倍率)

	東京卸賣	東京小賣	生産財(東京)	消費財(東京)	生産財(全國)
昭和二十二年平均	100・0	100・0	100・0	100・0	100・0
〃 二十三年	116・1	116・6	116・0	116・3	113・1
〃 二十四年六月	103・0	103・6	103・1	103・8	100・3
〃 二十五年三月	113・4	113・8	113・1	113・7	110・3(二月)

即ち通貨の發行高を見ても從來逐年大幅に増加して來たのが、二十三年末と二十四年末との比較では殆ど同額であつて、通貨膨脹の勢が止つたことが分る。又物價指數に於ては二十四年六月と二十五年三月との比較に於て、公定物價(東京卸賣、東京小賣)は大體戦前の二〇〇倍乃至二二〇倍の水準に落附いて居り、而も關物價は生産財、消費財共却つて大幅に下落しているのを知り得るのである。斯くて昨年一年を通じてインフレ收束——經濟安定の目的は略達せられた様に見える。

二

ところがドツヂ政策に依る經濟安定は、それと同時に又諸種の經濟的困難を招來した。其最も著しいものは諸産業に於ける資金難、即ち俗に云う金詰りの現象である。所謂金詰りの苦境は既に昭和二十三年の暮頃から一部の企業に依つて訴えられていたが、それが一般的となり一層深刻となつたのは昨年下半年期に入つて以來と見得るであらう。そして其最大の原因が昨年のドツヂ予算にあつたことは明白であり、それは予算成立の当初から二十四年度予算に於けるデフレ要因とし

て、論者に依り屢々指摘せられたところでもあつた。即ち其デフレ要因の主要なるものは、一は政府關係の債務償還であり、他は昨年特別会計として新たに設置せられた対日援助見返資金である。

先に記した如く二十四年度予算は、實質的な均衡予算であつたが、單にそれだけに止まらず、一般会計、特別会計の全体を通じて見ると歳入の剰余金を以て政府借入金、國債、復興金融庫債券等の相当額を償還する計画を含んでいた。此様な債務償還は云うまでもなく、一般の經濟過程から通貨を吸上げて、これを日本銀行に還流せしめる作用を有つ。尤も市中銀行保有の國債、復金債が償還される場合には、通貨は直ちに日本銀行に還流することにならないが、其割合は比較的小であると思はれるから、債務償還額の大部分が日銀への通貨還流となつたことは凡そ想像に難くない。日銀への通貨還流は、日銀の通貨造出の逆過程であつて明かに通貨收縮の原因である。即ち政府關係の債務償還が重要なデフレ要因として指摘せられる所以は茲にあるのであるが、昨年度中を通じ政府は貿易資金特別会計借入金二五〇億円、國債七五〇億円、復金債

一、〇九一億円、合計二、〇九一億円に上る債務の償還を行つてゐる。

次に対日援助見返資金は、アメリカの対日援助物資の國內に於ける販賣代金を貿易資金特別会計から受入れる特別会計である。援助物資は云うまでもなく、國內で流通している円通貨に依つて買取られる(輸入食糧が一般消費者に依つて買取られる場合の如く)。従つて見返資金會計に資金が繰入れられると、それだけ又流通過程の通貨が政府に吸上げられる結果となる。昨年度中見返資金會計に繰入れた金額は一、二七八億円に達するが、此様にして見返資金會計の設置とそれへの資金繰入れとが又大きなデフレ的要因と見られたのである。

尤も債務償還と云い、見返資金と云い、それに依つて通貨の吸上げられた額が直ちにそれだけ通貨の縮小となるのではない。債務償還に依つて日銀に還流した通貨は、日銀の貸出又は國債買取り(市中銀行からの)に依つて、再び流通過程に放出せられ得るし、現実に日銀は此様な操作を昨年中屢々行つてゐる。又見返資金會計も、繰入れられた資金を公企業並びに私企業への投資に運用することを予定し居り、決して通貨を吸上げたままにして置こうと云うのではない。(因に昨年度の國債償還額のうち六二四億円は見返資金から爲されてゐることを注意し度い)。故に計画の關する限りに於ては債務償還や見返資金を以て、積極的にデフレ・ションを作用せしめようとしたのではない、唯政府財政の收支均衡を図つて、より以上の通貨膨脹を阻止する、云わばインフレの要因を取除くことに主眼が置かれたのである。ドツヂ政策はデイス・インフレ政策であつて、デフレを意圖するものでないと称せられる所以も茲にある。

しかしながら政策実施の面に於ては計画立案、手續の遅延等の爲めに、資金の吸収と再放出との間に少からず時間的づれを生じ、それが事実デフレ的效果を妨いでいる傾向のあることは否定出来ない。即ち産業界の金詰りもこれに依つて一層其深刻さを増しているであらう。殊に資本的に基礎の薄弱な中小企業が最も強く其打撃を受けることになつたことは既に知られる通りである。

三

元來インフレーションの急激な停止が経済界に衝撃的な打撃を與え、一種恐慌状態を現出する傾きのあることは、夙に安定恐慌の語に依つて知られている。我國に於ける昨年來の金詰りとこれに伴う経済界の苦境が、所謂安定恐慌と云われる程の幅と深さを有つかどうかは一の問題であらう。しかし多くの企業が経営の困難に直面し、延いて事業の縮少、閉鎖、失業等の事態が續出していることは事実である。そこで一の問題が起る。即ちドツヂ政策は日本経済の安定と共に其自立をも目指しているが、若し安定化に基く打撃が余りに甚しくて生産の復興が阻得せられるならば、それだけ日本経済の自立は妨げられ、所謂角を矯めて牛を殺す結果を招來するのではないかとの疑問である。

試みに國民経済研究協会調に依ると、我國の鉄工業生産の綜合指数は昭和十年を一〇〇とし年平均で昭和二十二年四一・一、二十三年五九・一、二十四年七四・〇と比較的順調に回復して居り、二十四年六月は七七・三、二十五年三月は八〇・一となつている。昨年六月以後の上昇が比較的鈍いようであるが、これは金詰りの影響よりも、寧ろ既存設備に依る生産回復の限度に近づいた爲めと見られるべき節が多い。此外に尙

農、林、水産の生産があるが、此方面の生産は戦前に比し現在九〇%以上の回復率を示している。と見られる。ところが一方國民の生活水準は、去る六月三十日に発表された第四次経済白書に依ると、大体戦前の七〇%程度である。而も此際注意しなければならぬのは、上に見た諸生産活動の成果だけで此生活水準が維持せられて居るのではないことである。即ち吾々は現在の生活を支える爲めに、右の生産高の外に相当多額に上るアメリカからの物資援助を受けている。経済自立の域までには尙相当の距離があるのである。

別言すれば過去數年來生産の回復は比較的順調であるけれども、未だ自立の域に到達していない。此事は今日吾々の当面している経済的諸困難が、單にインフレーションの抑圧策に依るばかりでなく、根本的には我國経済の基礎的條件の劣弱さに發するものであることを示唆する。敗戦に依り四つの島に八千數百万人の人口が閉ぢ込められた現狀では、第一に食糧が自給出来ない。其他衣料の原料と云い鉄鋼、石油、原料、塩等々と云い、近代産業に必須な原料資源は我國に極めて乏しい。従つて我國の経済は産業を發達せしめて其製品を輸出し、其代價を以て外國より食糧、原料等を輸入する貿易依存の形態をとらざるを得ない。此様な關係から我國経済の自立の程度は何よりも、年々の貿易尻に端的にあらわれて見ることが出来る。即ち最近數年間の我國の貿易狀況は大体左の通りである。

(三) 貿易 狀 況 (單位百万ドル)		(輸出)		(輸入)		(差引入超)	
		終戦より昭和	一〇三	三〇五	二〇二		
		二一年末まで					
	昭和二年中	一七三	五二六	三五二			
	〃 二三年中	二五八	六八二	四二四			
	〃 二四年中	五一一	八六五	三五四			

即ち昭和二十四年の入超高は約三億五千四百萬ドルであつて、前年度の入超高四億二千四百萬ドルからは若干減少しているが、此入超高は即ち我國の経済が昨年中アメリカから受けた援助の程度をあらわしているのである。別の側面から云うとアメリカ政府の予算に占領地救済費 (GARRIOA) 及び占領地経済復興費 (EIROA) の二費目が計上されてあつて、其うち日本への割当金額が定つて居り、其資金で必要物資が購入せられて我國に送られる仕組になつている (此援助物資の國內での賣却代金が先に記した対日援助見返資金となる)。昨年度此ガリオア及びイロア資金の日本割当額は四億九千万ドル余であつたが、今年度はそれが二億五千万ドル程度に減額され、更に年々減額されて一九五二年度を以て打切られる予定となつて居るのである。此援助資金に依る入超のカヴァーがなくなり、輸出代金を以て完全に輸入代金を決済し得るに至つた時に、始めて日本経済の自立が實現せられたと云い得るのである。そして其爲めには我國として一層生産の増大と輸出の伸張に努めなければならないことは云うまでもない。

四

ところが茲で生産の増大、輸出の伸張を図るについて一つの問題がある。と云うのは我國に於ては石炭、鉄鋼、肥料、電力等の所謂基礎産業が、從來多額の政府補助金に支えられて今日まで生産を回復して來たことである。これ等の補助金は経済の正常化と共に当然停止されなければならないのであるが、唯停止するだけではそれだけそれ等商品の価格が高くなり、延いては第二次、第三次製品の価格を高め、従つて又需要の減退から生産を減少せしめることにもなる。依つて補

助金の停止を徐々に行うと共に、それに伴つて合理化に依る生産費の低下を図り、製品価格の値上りを結果しないようにしなければならぬ(昨年度予算では斯かる補助金を含む價格調整費が二千億円余に上つたが二十五年度予算では約九百億円に減額されている)。上記の重要商品の中には既に補助金の停止されたものもあり、又近く停止を予定されているものもあるが、斯くて産業合理化の問題が登場して来る。

又輸出伸張の面から云つても合理化の必要は同じである。即ち現在一ドル三六〇円の爲替レートを以てすると、綿業関係の製品は漸く外國商品と競争して行けるが、重化学工業の製品は生産費が高つて外國品との競争に耐え得ない。而も我國は今後東南アジアの工場として輸出産業の重点を漸次重化学工業に移して行かねばならぬ地位に置かれてゐる。従つて輸出の振興を図る必要からも、これ等重要産業の合理化は急速に進められなければならないことになる。

勿論産業の合理化もドツデ政策以來或程度行われてゐる。労働能率の向上、人員整理等に基いて少からぬ失業者を出していることは周知の事実である。しかし一層根本的な合理化としては、生産過程を更に機械化する事、出来るだけ新式設備を採用すること等が努められなければならないであらう。そして此一層重要な合理化を行う爲めには、云うまでもなく、巨額の資金を要すると云うことになる。

斯くて我國の産業を合理化し、生産と輸出の増進を図つて経済の自立を達成しようとするれば、何よりも設備近代化の爲めの資金が必要になる。ところが我國の現状では、國民生活の平均水準が戦前の七〇%と云うことに依つても想像し得られる如く、資金の新しい蓄積が少く、到底産業界の需要に應じ得ない。そこで一

時外資の導入が強く要望せられたのであるけれども此事も我國の必要だけで急速に進むとは考えられない。此様な事情は所謂金詰りの問題とも密接に関連するものであるが、茲に安定期の日本経済が当面している最も困難な問題の二つがある。

金融面から云うと斯様な経済情勢の下に於て、債務償還や見返資金に依つて引揚げられた資金の再放出が遅れ、徒らにデフレの様相を加重することは無意味である。又郵便貯金を通じて吸収された預金部資金が其処で滞留して完全に運用せられていない事実もある。其処でこれ等の政府関係資金を勸銀、興銀、折銀等を通じて産業投資に活用する措置が最近報せられた。要望せられた見返資金の敏捷な運用、長期資金供給の上に若干の効果を及ぼし得るものと期待されている。

ところが一方政府関係資金の引揚超過に伴つて、一般市中銀行の貸出が昨年下半年期以來著しく増加した。これは債務償還、見返資金等に依る資金吸収を埋合させる作用を有つたものであるが、貸出増加率が預金増加率よりも遙かに大となつた爲め、市中銀行の日銀よりの借入高が亦急増加した。金詰りの困難も勿論等閑に附し得ないが、さればとて生産の増加が資源的又は技術的條件の制約に依つて容易でない時に、安易に資金の供給を行うことは、再びインフレーションの進行を誘発する危険がある。日本銀行は去る五月から一般銀行に対する貸出政策を引締めの方角に轉換したが現下の情勢から見ると一應理由のある措置としなければならぬ。

斯く見て來ると当面の金詰りも簡単に解消するものとは考えられない。日本経済の進路には種々の困難が横たわつてゐるが、それは金融政策の轉換等に依つて容易に打開され得る性質のものでないことを、更めて注意する必要がある。

—二五・七・三一—

「つくる喜びと生きる呪い」

—戯曲「火山灰地」について—

教授 杉原四郎

丸山眞男氏は、政治学の研究にとつては文芸上の作品も亦大いに参考に値するとして、たとえばスタンダールの「パルム僧院」は絶対主義の政治につき、トーマス・マンの「マリオと魔術師」は独裁者と大衆との關係について、有益な示唆を與えることを指摘して居られるが、経済学でも事情は同じであつて、たとえは久保栄氏の戯曲「火山灰地」——それは北海道の特殊土壌地帯を背景に日本農業の社会的特質を形象化せんとしたものである——は、山田盛太郎教授の「日本資本主義分析」のあの難解な文章をたどるよりもある意味でははるかに明瞭に日本資本主義の構造的矛盾をおいてくれる。私は日本新劇史上最大の遺産の一つといわれるこの作品(昭和十三年初演)を最近深い感銘をもつて読んだのであるが、目下の私の学問的関心から特に教訓的だつたのは、第一部第三幕目の「かま前検査」の場で、自分の掘いた炭を全部とり上げられて大地に身を投げつけて慟哭する青年が、にもかかわらずやがて起きあがつて泣く／＼樂に薪を入れるところである。この幕のはじめに「つくる喜びと生きる呪い」をこめて、今日も明日も燦々炭燐炭」という言葉が朗誦されるが、まさに「つくる喜びと生きる呪い」という現在の社会における労働のいわば *The curse of living* と、歴史のつづくかぎり「今日も明日も」おこなわれる生産の根源的不断性とを、作者は、その青年たつた一人の舞台でなされる動作の中に見事に形象化し得たのである。

「火山灰地」は戦後新潮社から重版され、最近中央公論社から久保栄選集の一つとして刊行された。これについては下村正夫「火山灰地と生産力の理論」(雑誌「潮流」第三卷第一号)や一昨年再演されたときの下村氏等による合評座談会(雑誌「未來」第一集)などが参考となる。 (一九五〇・七・二七)

細江逸記先生の學問

文學博士 山本忠雄

今から十五年前、宮島で夏期大学を催したことがあつて、細江先生を講師の一人に招き、英語學の講演をしてもらつた。我々が大学を卒業して間もない頃で、細江先生の名前は「英語青年」誌上で知つてゐたが、直接教示を受けたのは其時が始めてである。「動詞時制の研究」が既に出ていたかどうか記憶は確かでないが、「英文法汎論」は讀んでゐたように思う。多少の予備知識があつた訳であるが、宮島の講習会で始めて著者の風貌に接した次第である。其時の印象は今でもハッキリ憶えている。如何にも學究らしく自信が強く、時には独断的と感ぜられることさえあつた。手強い學者という印象を受けた。しかしそれは主に表現態度なのであつて、内容そのものは堅実なものであつた。

其後大阪の友人宅で高商時代細江先生の教を受け京大で言語を専攻してゐた人から、細江先生の書齋生活を聞いたことがある。何でも机の傍にNEDと方言辭典を並べて研究に没頭しているという話であつた。日本には珍しいドイツ張りの學者だという感じがしてゐた。ドイツの學者でもフンボルトではなくグリムと云う所であらう。

宮島での講演で細江先生の語つたことを二つ丈覚えてゐる。どちらも丁抹の英語學者イエスベルセンに関することであつたが、たしか「Heyouarel」(此処にありませう)の「you」が古い與格の名残であることをイエスベルセンが発見した事実と言及して、學問の力は偉大なものだといふ話と、もう一つは日本にはイエスベルセンに心酔し過ぎる者が多いという自信たつぷりな批評であつたと思ふ。市河先生が第一次大戰のた

めイエスベルセン訪問の予定を中止したので、細江先生が日本の英語學者では始めてイエスベルセンに面語した訳である。どちらも批判力のきびしいことでは誰にも負けない學者であるが、其節どんな會話が交されたかイエスベルセンの自傳にも細江氏の名前が出ないので今は知る由もない。此二人の亡い現在の英語學界は何と言つても淋しい。

細江先生の名前は「英文法汎論」の著者として一ぼん知られてゐることゝ思ふが、著書としてはスペンサーやシエークスピアの註釈の外に「語時制の研究」と「英語綴法の研究」と「英國中部方言の研究」という大著がある。學問的には最後の三冊とスペンサーの註釈が代表的なもので、とりわけ方言研究は細江先生の本領で、内容的に最も秀れた業績と言へるであらう。動詞研究は新刊当時私も誌上に紹介したが時制研究には疑問を残し綴法研究は無條件で賞めた記憶がある。それは方法論的に注目されるべきもので、市河先生もこういふ研究は英語で發表されない、海外に紹介できないから惜しい、という意味のことを記してゐる。どちらも平素の経験と蒐集した多数の事例により動詞形のカテゴリーと用法を論じたもので、時刻は要するに綴法の種類であるといふ結論である。山田孝雄博士の學說に影響を受けたことは著書の中にも明記してある。海外でも同様な方向を暗示する新しい研究が發表されてゐるので注目されるが、其中でも細江先生の所論が最も鋭敏で結論も徹底的であつた。言語が心理学の方面から神保格氏の鋭い批評があつたのは当然であるが、結局は言語史家と言語科學者の対立を示したも

のである。これは外國にも例のないことではなく研究法の相違から來る論争なのである。要するにテンスの表すものは心理的な時間なのであつて、時間という客観的なものを別なカテゴリーに入れるか、心理的現象即ち細江先生の言う「思想様式」として、それを表すテンスをモードの中に包含するかといふ問題である。譬えて言へば虹の七色を同じ色彩として一轄するか、明るい色と暗い色に分けるかといふような問題で両方の中間帯としては動詞の未來形や擴充形が認められるであらう。綴法研究に續いてアスペクト研究が發表されなかつたのは惜しむべく、もしそれが發表されておれば、細江先生の所論は一層明確になつたことゝ思ふ。

文法上の方法論は面倒なもので、一般言語學は勿論心理学や哲學の領域に亘つた言語理論に入るので、言語の事実性から遠ざかる危険がある。細江先生は心理学や哲學に踏み入ることを好まず、其方面に基礎的な欠陥のあつたことを自認してゐるが、それでもよろしいと思ふ。言語形式に即して歴史的研究に徹底することとは、それで立派な研究が成り立つのであつて、偶々カテゴリーといふ問題に入つたために、大膽な自信を示し乍らも、一抹の不安が去らなかつたのであらう。然し部分的で便宜的且つ機械的な従來の説明に甘んぜず、「言語學者乃至文法學者は須らく垂幕の背後に動く実体其物を捕えなければならぬ。諸の効果を綜合して本質を捕え、本質を捕えて効果を窮め、分析と綜合、綜合と分析、更に分析と綜合の完成を期しなればならぬ」と言ふ細江先生の態度は正しいと言わねばならぬ。序ながら此種の問題を論じたものでは、岡倉先生紀念論文集所載の國語動詞の相(voice)の研究がすぐれた一文であることに注意しなければならぬ。こういふ理論的な研究よりも細江先生の本領の実証

的な英語史研究特に方言研究であつた。豊富な英語史と方言の知識を綜合して、英語の言語学的研究を進めた点は斯界の第一人者であつたと称してよい。「言語学的」なる語は著書の随所に見当るが、細江先生の研究方法を最もよく表している。それは実用的又規範的な文法ではなく、言語事實の観察と比較によりとりわけ歴史的な研究方法であり、往々文學論や其方面の註釈・韻釈の類に學問的な正確さの欠けていることを批判して、嚴正なる學問的立場を示したものである。又所謂「史的現在形」に關し、修辭學又は文体學的な説明を排し、言語原理や文法の説明をなす者は効果よりも事實と本質其物を追求すべきことを論じている。原理論としては其通りであるが、細江先生の時制研究は文体論的な所が多いというのが私の印象である。そんなことを言ふと叱られるかも知れないが、それは悪い意味ではなく、表現の主観性を重んずればそうなるのである。理論や個々の批評は別として、テクストの涉獵及び實地踏査による古今の英語と方言の凱切な材料を多量に持合せ、それを自在に引用して研究の實質を示す所は、何と言つても英語學徒にとつて大きな魅力である。實際踏査と具體的な材料の強味は、我國に珍しい *Forschung* を提供することが出来たのである。古い英語を骨董品扱いにせず、方言を珍奇な現象又は變則な語法と見ないで、むしろそれらに英語の本質的なものを認めたのは、正しい意味で「言語学的」と称せられるであらう。歴史的研究と方言研究が集大成され、更に歴史的音韻論が完成して、グリムのゲルマン文法に比較すべき体系的なものが成就しなかつたのは、細江先生としても一生の恨事であつたと察せられるが、堅固な基礎が築かれたことは、我々としても感謝に堪えない所であり、又學界のため喜ぶべきことと思ふ。

細江先生の研究方法及び其成果と上記の貴重な材料の價值は、偶々ドイツケンズを中心に口語・俗語の研究を志している私に実感できるものが多分にある。辭書にしても文法にしても、其他の參考文獻にしても、直接材料の經驗を持つ者には、不満な点が多々あり、個々の事實を自分の體驗によつて確認し、從來の説明を修正する丈でなく、研究方法を改革し、英語學そのものを再建したくなるものである。細江先生は動詞研究に革命的な所論を示したが、辭書や文法そのものの方法に對しては根本的に批判的ではなく、在來の意味での文法家の範圍を出なかつた。又古い日本語や語系の異つた諸言語から引用旁証の多いのは、博學な言語學者として當然であるが、これは誰もが模倣すべきことではなく、そういう廣い比較研究には一般言語學の理論的根柢を要するので、我々としては參考の程度に止めるべきものであらう。それは知識としては興味深いが、學問としては比較するのに嚴正な方法を必要とするので、ドイツケンズと分れるのは其処にある。むしろ語系を等しくするゲルマン語又は印歐語の範圍内で、比較言語學的研究や歴史文法的研究に集中すべきであらう。隨所に見える比較研究は、細江先生がそれにならわしい資格を具えていたことを証明している。

私はドイツケンズの英語を研究しているので、細江先生の方言研究から得る所が多く、又先生の研究經驗に對して同感を禁じ得ないが、同時に俗語や口語の研究からも然るべき材料を提供すれば、細江先生の方言研究にも多少の參考にはなつたであらうと思ふ。それは研究上「血は水よりも濃い」ことを知つているからである。曾て誌上にジョージ・エリオットやハーティの方言を紹介したものを私は興味を持つて讀んだが、「英國中部地方の方言」の大著を通讀したのは今回が初めて、色々思い合せることがあり、それを二三選んで紹介し、先生の方言研究を讀める言葉に添えたいと思ふ。

【Hijious (Hideoous) なる発音がエリオットに一箇所出る(一六五頁)そのであるが、此発音はドイツケンズの好んだもので、初期の書簡にも戯れに用いているが作品で大量に出るのはロンドン方言を写した「ボス」である。十八世期のウォーカーの辭書には 'hijious' (odious) なる形が出ており、少くとも十八世期前半には廣く用いられたものらしい。

【Indy (India) の如き発音が紹介(九四頁)してあるが、それで面白いのはドイツケンズに多い 'airy' (area) なる発音である。之は最後の [ə] の脱落したものと市河先生の説明があるが、細江先生は無強勢の語尾閉音節に於て [ə] が [i] となると説明している。結果的に見れば [ə] の脱落に過ぎないが、其過程はそんなに簡單なものではない。'area' > 'airy' は ['əria] > ['əre] > ['ére] > ['éri] なのであらう。['(r)ə] > ['(r)é] は 'serious' > 'serous' に見え、['(r)ə] > ['(r)é] は方言に出る 'ne' 'er' > 'nary' や 'e'er' > 'ary' ['éri] と比較すべく、ドイツケンズにも 'Sarah' > 'Sarey' なる例があり、シェークスピア當時から現代の英語にかけて共通な現象である。

As black as black' なる比喩が方言に多いのに反し as black as black can be' は方言に稀で、之は近世文語から導入されたものかといふ説明(二九七頁)がある。方言心理から言へば 'as black as black' は其れ丈で端的な強調形であると論じてあるが、之はイェスマルセンの言う如く、'as black as black can be' から動詞を除いて生じたもので、'as good as gold' などの連想で支えられたものと説明するのが妥當である。それは此形が方言・俗語の多いドイツケンズ・アラバッドに多く、逆に 'as black as black' が稀であるという事實によつて推定される。少くともかような材料を併せ持てば、細江先生の結論は異つたものになつたであらう。(細江文庫紀念講義)

ジャーナリズム三軍観

員外教授 井上吉次郎

三軍という名や区分は、相当に古い。三軍を叱咤するなんて勇ましい文句も出てくる。無論、空軍というようなものの夢想もされない時代からある。ところで、空軍の發達で、三軍思想は眺え向きになつて来た。

ものを三ツに分ける考え方も余程古い。キリスト教では、父と子と精霊の三位一体がやかましい。佛法僧の三分法は、それよりも古代の思想である。アツシリヤやエジプトの原始宗教思想には一層古代的な三分法が見られよう。カントの三批判書というのが近代思想の先登を切つた。

「カントは何でも三ツに分ける、我輩は三ツのものを三ツに分け、二ツのものを二ツに分ける。これを自然分類法という。」

といつた明治学者がいた。弁証法は、三三分を嫌つて、二者対立に眞理を發見しようとする。このところは、ヘーゲルの專賣で、マルクスも二分法だけでいえば亞流だ。日本の軍部も、あれほどマルクス嫌いで、それで亞流だつた。というのは、三分法を探らなんだ。

独立の空軍を認めなんだ。飛行隊は認められた。しかし、最後に打ち滅ぼされるまで、陸海軍の対立闘争に終始した。勿論、口では、陸海軍は鳥の両翼、車の両輪、といつた。事實は、片輪車のチグハグな進退だつた。

「英米を打倒したら、どうする」
と或陸軍人々に尋ねたら、
「ソ連をやつ付ける」

と答えた。

「ソ連をやつ付けたら、どうする」
と重ねて聞くと、

「帝國海軍をやつ付ける」

といつて、阿々大笑したという笑い話がある。それくらいに、陸海軍の抗争が、世間先刻承知のことだつた。各飛行機を持ち、飛行將兵を別々に養成把持した。「三軍を叱咤するといわれる將軍達は、みな二軍思想だつた。」

とうとう、空軍をうまく使うところへ行かなんだ。陸海空三軍時代が来たんだのに、車の両輪、鳥の両翼の考えが抜けず、それも片輪片羽、が己れの面目だけで羽搏きして、遂に往生してしまつた。

ラジオもまた最近代に發生發達したところは、飛行機に似てる。共に空中活動に属する。ジャーナリズムというものは、心の態度のものだ、と思う。アカデミックとジャーナリズムを対立させる考え方がある。アカデミックは、主として因果の法則を求め、ジャーナリズムは、主として興味を中心とする知識を求めるといふようなことで、人間知識の領域を二分しようとして試みる。ところで、大多数の社会人は、所謂学者といわれる人達でも日常生活の相当部分においては、その知識或は認識の目標或は範圍をジャーナリスチックなものの方々に置く。或は、ジャーナリズムの支配に心的傾向を任せる。ジャーナリズムは、人間思想を動かす極めて強力な軍隊だ。山中の賊は捕えられ、心中の賊は捕らぬ、といわれるが、ジャーナリズムの勢力には、なかなか対抗しきれない。ジャーナリズムそ

のものが、心の態度のものだからだ。

この三軍を我々は新聞と雑誌とラジオだと比喩的に考えることが面白いと思う。差し当りラジオは空軍だが、こいつの大家心理支配が恐しいほど大きい。B29もあれば、ジェット機もある。現代ジャーナリズムでは、ラジオを抜きにして、その成立が考えられない。新聞と雑誌とが、ジャーナリズムの二要素だという考へ方は、旧軍人の双翼兩輪主義で、まず時代後れは免れない。といつて、ラジオの優位性を認めることも、どうかと思う。どうせ、ジャーナリズムは、道聽途説だ。耳学問だ。ラジオに打つて付けの知識だ。ラジオが、こんなに發達したんだから、新聞は、もう用がない、といわれる。

すると、「ラジオで弁當が包めるかい」と反駁したというんだが、こいつは、見當が違つてる。ラジオを如何に重点的にジャーナリズム知識の汎濫に使つても、それは知れたものである。そこに限界がある。ラジオは時間雜誌のもんだ。それは横幅を持たない。廿四時間ぶつ続けにシヤベつても、空間的世界に起つた事件と意見の何程も時間に讀取され得るものでない。ここに、ラジオが独りジャーナリズムの王座を占めるには致命的な欠陥がある。特長は、無論、大いにある。それは、ジャーナリズムの飛道具であるところが、第一のミソだろう。風説は、それ自体の動量でも動くもんで、そこが風説といわれるわけだが、ニュースは、風説の確かめられたるもの、即ち精製されたる風説として弘布手段に乗る。その場合、雑誌の動きは一番遅い。新聞が中間だ。どんな呑氣な新聞でも、一晝夜をおいて傳達する。ラジオは即刻通報する。号外というものをおいて此頃トラックで撒く。撒水車ほどの疾足だ。しかし、それでも、撒く前に、網集され、印刷されねばならない。そして、町を車が走らねばならない。印刷が高速度になり、チリンチリンと腰の轆を鳴らして、

人の兎が走る代りに、トラックでスピード・アップした。けれども、ラジオが、すぐ、ニュースを耳にぶつ付けるのと、まさに、雲泥の差だ。時はニュース価値の函数だ。この点で、新聞は、ラジオに零敗である。吳清源と、他嶺土との手合の機譜をみていると、持時間の消費量が、他の人が一時間何十分と使つて間に吳さんは零分と書かれてるのが往々見かける。ラジオと新聞とのニュース傳達の時間競争は、これ以上に差がある。殆んど手合にならない。

けれども、ジャーナリズムで、時間が唯一の要素でない。即ち早いだけが能でない。大体、ジャーナリズムの知識構成の特徴は何にあるか。ニュースの傳達が大きな仕事だ。人みなニュースを聞きながら。しかしラジオのニュースの時間に耳を立てて世界のニュースを聞いたとて、それだけで、その人のその日の生活が完成したとはいえない。我々は、当代に生きねばならない。その日一日その社会の雰囲気に分享せねばならない。何に依つて、それが出来るか。ここに、新聞の大きな役割が出て来る。新聞は、その日一日のその社会の社会推移を反映させてる。歴史の一日の断面になつて。だから、新聞を眺めれば社会生活に手つ取り早く入れる。新聞を眺むのを無精すると午睡してた異下の蒙みたいで、社会生活に取り残される。ラジオでは、社会生活を反映させるに完璧とはいえない。もつとも、ラジオは聴感覚を利用して、社会的事件を具象的に聞かせる利点はある。しかし、極めて部分的であり、局所的であつて、社会全般を映せない。群盲象を撫でる類いだ。即ち社会推移を完成させ得ない。そこがラジオの新聞にかなわない主要点である。ラジオは新聞の事ふれだ。駿足で先走るが、後で新聞をみないと人心満足せず、ジャーナリズムは完了しない。

そこで、雑誌に何が残されてるかの問題が残るわけ

だ。大体、ジャーナルとは、雑誌みたいな定期刊行物或は頁数の多いものを指す言葉と解される。新聞は、ヘーパーだ。「ヘーパー、ヘーパー、ニュース・ペーパー」と呼び賣りされる。だから、新聞記者は、ペーパー・メン或はペン・メンで、ビー・メンというがよい。ジャーナリストでは語源的には、おかしい。ところで雑誌記者といわれて、ジャーナリズムの片棒担いでるようにみられるが、そして、ジャーナリストの系図的正統者は、その人達に違いないともみられるが、日本の総合雑誌なんかは、果して記者が居るかどうか、という問題が出せると思う。

一頃「新聞は筆で書くものでない。足で書くもんだ」というような教訓を先發記者がいつたことがあつた。徳富蘇峰が、國民新聞をはじめた当時、毎朝出版社の途で、一人二人を訪問して見聞を取つた。これが、蘇峰先生の記者としての成功の基礎だつた。といわれる。新聞記者は、事件に直面して、ニュースを掴まねばならない。現場の渦中に飛び込むことが要件だ。知識はフアリスト・ハンドであり、断じて、セカンド・ハンドであつてはならない。しかし、記者は、記者でなければならぬ。樞大にせよ、チビ筆にせよ、万年筆にせよ、ボールペンにせよ、それを振つて、事件を書き下さなくちゃならない。筆に依つて事件を紙上に再現することが記者の仕事である。書かぬ記者とは矛盾だ。勿論、矛盾の多い世の中だから、書かざる大記者も居るには居る。雑誌に至つては、そこに書く記者が一人だつて居るだろうか。第一、その必要があるかどうか。総合雑誌というのは、知識或は知識の片らのマガザンだ。百貨店には、佛壇から龜の子タリシまで取揃えてる。日本の総合雑誌にも、随分有益な、また無益な或は有害な、或は無害な知識意見を取揃えてる。とこ

るで、そこに、その雑誌の生命の徴表である性格というものがあろうか。申すまでもなく、中央公論は中央公論、改造は改造、文秋は文秋と、それぞれ特色あるみたいにいわれているが、それは、三越、高島屋松坂屋が、それぞれ特色ありとされるのと、大違ひはない。そんなことでは、大雑誌の性格形成にならぬ、と思う。むかし、「太陽」は浮田和民が巻頭論文を書いた、あれがないと太陽もいひ雑誌だがと皮肉をいう人も居た。しかし、浮田に依つて当時の太陽の性格形成がみられた、と解される。イギリスあたりの週間誌は、多くその主筆に依つて賣れてる。最も多く執筆するのも主筆だが、その人が、その雑誌の生命中枢になつて。日本にも、その人の名と切り離せない雑誌を見受ける。しかし、その人は儲ける中心であることが重点で、雑誌眞價の中心とは考えられない。月刊総合雑誌は、一層、個人を離れる。全くの論文隨筆のマガザンになり、記者というものは、それを集めて歩く。百貨店の買付け係みたいだ、他に能がなくてもよい。それは、原稿取りというもので、記者とはいえない。如何に、それぞれの陣営に控えてるジャーナリスト、或は、フリーランスの半ジャーナリストを來月の巴れの雑誌に動員するか、ということが、活動意欲の凡てであり、これをやつて除ける。手段は問うところでない、能力が、その人間の價值生命である、というんでは、ちと考えさせられる。無論、こんな総合雑誌だけがジャーナルの凡てでなし、これとでもジャーナリズム活動として無價値どころの段でないが、ジャーナリズム活動の後詰たる雑誌には、まだ他にも、いろいろと行き方があるう、と思える。その意味は、決して、ラジオや新聞より下だ、とはいえない。ジャーナリズムの三軍思想は、分類として面白いと思う。

(筆者は文学部新聞學担当)

學内報

學長改選

岡野留次郎教授當選

任期満了による学長選挙は、財団法人関西大学寄附行爲第十四條により、六月二十四日教授、校長より成る聯合会において選挙の結果、岡野留次郎教授が当選七月六日の理事会並に同十三日の協議員会において承認、同日附学長に就任せられた。

臨時協議員會

七月十三日午後四時より天六学會理事會議室において臨時協議員會を開催、吉田晉松氏議長として議事をすまめ、宮島理事長より学長選挙の報告ありて岡野留次郎教授の学長就任の件満場一致承認し岡野留次郎教授の挨拶あり、ついで学内事情の報告があつて協議をすまめ、寄附行爲改正については七名の委員、寄附については五名の委員を挙げ調査研究することとなつた。

因に寄附行爲改正準備委員は、中谷敬壽、石原孫市、中井彌六、森川太郎、中務平吉、神宅賀壽恵、大月伸の七氏寄附委員は、下條小野右衛門、森内梅吉、荒賀勝平、樫本信雄、水谷椋一の五氏

教育職員免許法認定講習會開催

昭和二十四年制定施行された教育職員免許法によつて、本学に於いては一般教職員及本学学生のため夏期休暇を利用して、免許法認定講習會を開催する。本講習會は文部省の認可をうけたもので、上級教育職員免許状の授與を受けんとする場合、合格証明書を交付することになつてゐる。

一、会場 天六学舎

二、期間 七月十七日より九月六日

三、講習科目、單位、講師

教育原理 三單位 東京教授 下程 勇吉

教科教育法 三單位 本學主任 鈴木 祥蔵

教育史 二單位 本學主任 實田 知義

教育評價 二單位 本學主任 鈴木 健一

教育心理学 二單位 本學主任 小田 武

青年心理 (発達心理) 二單位 本學主任 藤原 慶

教育心理学 二單位 本學主任 遠藤 汪吉

教育行政学 二單位 本學主任 眞辺 春蔵

教育社会学 二單位 本學主任 青柳 英夫

教育社会学 二單位 本學主任 田中 健一

夏季語學講習會開催

恒例の本学夏季語學講習會は七月十七日(月)より八月五日(土)まで三週間天六学舎に於て開催する。科目は英語(高校上級)、フランス語(初級)、ドイツ語

(初級)で、講師は左記の通りである。英語科 廣瀬檢三教授 梶原秀男教授 榎本金次郎教授

フランス語科 三木治教授 中井駿二教授 高塚洋太郎教授

ドイツ語科 上道直夫教授 福本喜之助教授 見次直雄教授

國文學夏季講座開催

大阪府下の大学の國文學担任教授で組

岡野學長略歴

明治二十四年四月和歌山縣橋本町に生る。広島高師英語部より大正二年京都帝大文科大學哲学科に入り、初め桑木、朝永阿博士の下に主として純正哲学及び哲学史を探索せられ、桑木博士の東大に轉じて後は、専ら西田幾多郎博士の門下として新カント派及び現象学派の哲学を研究せられた。大学院修業後大正七年旅順工科学堂教授、同八年松山高専教授、同十年大阪高専教授として哲学概説、論理学、心理学及び英独語を講ずるかたわら専門の哲学研究を続けられ、昭和三年文部省在外研究員として独乙フライブルヒ大学にてフツァールの指導を受けられた後、新にマールブルヒ大学より轉じ來つたハイデッガーの嶄新な学風と緻密な論理とによつて深い影響を受けられて帰朝昭和十年台北帝大教授として哲学及び哲学史講座を担当、文政学部長を歴任

せられ、其の間哲学的立場の確立と体系化を図り、幾多の研究業績を發表せられた。

終戦後台北より引揚げ同二十三年本学文学部教授として哲学及び哲学史を講ぜられて今日に至る。

著述の主なるものとしては、「存在論的領域としての『超越』について」(昭和六年朝永博士還暦記念論文集所載)、「弁証法的存在論と其の立脚地」(昭和十一年台北帝大文政学部哲学科研究年報所載)、「時間空間及弁証法」(昭和十二年同報所載)、「行為現象学の一般的理念」(昭和十三年同前)、「行為現象学序論」(昭和十七年同前)、「アリストテレス存在論の問題とその出発点」(昭和二十四年「人文科学論集」所載)、「アリストテレス存在論の基礎構造について」(昭和二十四年「哲学研究」六月、八月、十月、廿五年二月、七月各号)、「西洋哲学史」(大正十年イデア書院版)等がある。

學内人事異動

昭和二十五年七月十三日付関西大学學長に補す

教授 岩崎 卯一

同七月十二日付任期満了に付関西大学學長の職を解く

教授 松原 藤由

昭和二十五年三月三十一日付大学経済学部勤務

鈴木 重貞

増田 忠雄

小牧 健夫

高塚洋太郎

宇野 史郎

堀 喜望

山本 忠雄

高橋 貞三

本田 利夫

生島 達一

中田 五一

陶山誠太郎

村山 修一

森原 武夫

寛田 知義

林 健二

木村 春彦

伊吹 武彦

池田 栄

末永 雅雄

同四月一日付嘱託昭和二十五年年度講師 講師 秋山 博愛

同四月一日付任専任講師

教授 松原 藤由

同四月一日付兼任短期大学部教授

経済学部教授 矢口孝次郎

同四月二十四日付補短期大学部長

久保田 肇

萩原 潤三

大西 忠雄

藤川 健治

同四月二十五日付嘱託昭和二十五年年度講師

助教 前田 敬作

同四月三十日付依願解職

兼弘 正雄

楠 五郎

藤田 義信

同六月一日付嘱託昭和二十五年年度講師

教授 岩崎 卯一

安藤 俊雄

錦方 貞亮

飯田 正一

石浜純太郎

大小島眞二

岡野留次郎

金子又兵衛

木村 健助

田中 照

高橋 盛孝

中谷 敬壽

福島 四郎

藤谷 謙二

堀 正人

三谷 友吉

森川 太郎

同 山田松太郎

員外教授 西本 寛一

同 沢瀨 久孝

同 講師 大阪谷公雄

同六月二日付委嘱大学院英米法研究講座担当

員外教授 小島 吉雄

同六月二日付委嘱大学院國語及び國文學研究講座担当

員外教授 渡辺 格司

同六月二日付委嘱大学院大陸文學研究講座担当

同六月二日付委嘱大学院刑法學研究講座担当

同六月二日付委嘱大学院英米文學研究講座担当

同六月二日付委嘱大学院國際法學研究講座担当

恒藤 恭

石田 憲次

同六月二日付委嘱大学院英米文學研究講座担当

陶山誠太郎

魚澄惣五郎

中西信太郎

大塚 高信

猪熊 兼繁

林 健二

岩倉 具実

同六月二日付委嘱大学院講師

辻本 春彦

同六月十九日付嘱託昭和二十五年年度講師

水本 信夫

同六月二十八日付嘱託昭和二十五年年度講師

短期大学部教授 富山 忠三

同七月六日付補短期大学部学生部長

同

同

同

クラブハウス新装成る

千里山学園のクラブハウス改装工事はこのほど竣成し内部の設備も面目一新したので、外客の接待、教職員の場合に当てることになった。名称は「以文館」(出典、論語顔淵篇「曾子曰、君子以文会友、以友輔仁。')と改称せられる模様。

寄附保険計畫

大学院、新制大学、短期大学並に附屬学校の設備拡充、研究設備の充実其他学生の補導福利施設や内容改善には相当多額の資金を必要とするので、現在アメリカの諸大学とりわけハーバード大学、エール大学、プリンストン大学等で盛んに行われ、我國でも早稲田、慶應、立教等の大学で実施して夫々実績を挙げている。寄附保険を本学に於いても目下研究中である。

かくぼう抄

△法博岩崎卯一教授(前学長) 六月初旬より病氣自邸にて静養中

△法博西本寛一員外教授 昭和二十五年年度司法試験考査委員に任命された

△韓國ソウル大学教授哲学博士安浩相氏は、去る七月十九日挨拶のため來學せられた



學生

最終専門部祭

本学専門部は、六十有余年前関西法華学校設立以來其の長い歴史と輝く傳統とを誇つて來たが、今回の学制改革に依り來年度より短期大学部に発展的解消することになつたため、其の名残りを惜しむと共に有終の美を飾るべく専門部祭は七月八、九両日盛大に舉行された。第一会場は朝日会館にてオーケストラ、雁音樂試劇、映画等の演奏やまた一方法研、經研、商研、社研辯論等学生の學術研究発表が盛大に行われ、第二会場では應援團体育部共催の下に道頓堀ドミノで「アデュー専門部」のダンスパーティーを開催した。

陸上競技部

西日本学生陸上に優勝
第三回西日本学生陸上競技大会第二日は六月十八日平和合體技場で舉行、總得点九十九点で優勝した。

- △一万里 大野 33分52秒
- △中障害 田尾 53秒3
- △千六百級走 岩崎、田尾、馬場、越賀 3分30秒4 (大会新記録)
- △棒高跳 平原 3米40

籠球部

大阪綜合選手権大会にはY.M.C.A.を62対44で破り優賞、續いて六月二十四、五兩日同大体育館に於て西日本綜合選手権大学に出場し決勝戦には斯界の強豪神戸学士クラブと対戦して47対45で優勝した

卓球部

曩に大阪府下選手権大会で優勝した当部は、マ元帥杯全日本選手権大会に山根君が代表に選ばれ出場の管

水泳部

大阪学生水上競技大会に出場、宝塚プールに於いて綜合一二五点で優勝したが來る七月二十二日及二十五日の兩日東京神宮プールに於ける全日本学生水泳選手権大会に十一名の選手を派遣することになつてゐる。

拳闘部

全日本学生拳闘王座決定戦は東の代表日本大学と西の代表本学との間に、去る七月九日甲子園で行われた。試合は猛烈なシューティングとなり、両校應援團が熱狂する接戦の末本学は平間(日大)一井上(本学)の試合判定に不服を表明して最後の試合を棄権した爲、残念乍ら四対五で王座を本年も日大に譲るの止むなきに到つた。試合結果左の通り

- | | |
|---------|------|
| 日大 | 本学 |
| ○永田 KO | 舟橋 X |
| ○奈良岡 判定 | 橋本 X |
| X神保 // | 安田 O |

美術部

全関西学生美術展に本年始めて参加し左の諸君が入選した。

- | | |
|---------|------|
| X柳井 // | 福本 O |
| O土尾 // | 梅本 X |
| X岡野 // | 栗田 O |
| X梶 // | 藤波 O |
| O平間 // | 井上 X |
| O佐々木 棄権 | 高尾 X |

寫眞部

全関西学生写真展に参加して二年目、入選作品も昨年の二倍に達した。「窓」(八沢良彦)、「火事」(山本薫)他九点の入選、他は佳作として同展に異彩を放つた。学内平和祭にも新作を発表、「大掃除」、「深夜の地下道」、「ある風景」等の佳作を得た。

茶道部

新しく出発した茶道部は入部希望者多く既に部員四十名を教え、戦後学生の落着きを想わせて嬉し事実である。

新聞學研究部

ジャーナリズム講座開催

來る七月二十四日より同二十九日まで六日間ジャーナリズム講座を櫻宮公会堂で開催する。当日はG.H.I.新聞課長インボデン氏のメツセーヂを始め、左の諸氏の蘊蓄を傾けて夫々の部門に有益な講演が期待されている。招聘講師左の通り
鈴木文史郎、楠五郎、赤井直泰、浦上五六、西山史郎、中西秀一、中井駿二、板倉進、井上吉次郎、森田亞雄、藤田義信、高木盛久の諸氏である。

山岳部

本夏季休暇を利用してアルプス登山リクレエーションを計畫、希望参加者約五十名近く、七月二十五日午後七時五十分大阪出発、翌二十六日富山着、劍沢にキャンプして劍山登山し、立山、五色ヶ原等を経て三十一日大阪へ帰着の予定である。山岳部員のみは残つて、黒部川、後立山、鹿島槍等の登山を行い八月十五日大阪帰着の予定である。

訂正

前号(二三二号)陸上競技部記事中心「西日本学生大会」とあるは「全関西学生大会」の誤りに付訂正します。

竹城植野武雄先生

教授 石濱純太郎

植野先生の生涯を聞いたのは千里山経商学部の教官室に於いてであつたが頗る僕を驚かした。その眞であるを知ると共に長い歲月の交際を想起して感慨もたゞならざるものがあつた。此処に先生を偲んでみたい。

植野先生は名は武雄、号は竹城、和歌山の人。植野木州將軍の嫡男である。明治三十年一月一日名古屋で誕生した。成城中学校を卒業したが、眼疾の爲め父君の武から文へと移り、東京大学文学部の支那文学科選科生として学ぶことゝなつた。同科の卒業論文は「菅詩の研究」で日本漢学史の範囲であるが、論文には図書館の任務を論じて中日親善の要諦に及んだ漢文一篇が附載されてゐる。これこそ先生の生涯の序文だつたのである。卒業後は上海に渡り東亞同文書院の図書館に入つてその第一歩を踏出した。その間早くも已に地方志の研究に入り、その一端が後に「蘇州方志考」となつて「收書月報」第二十六号に出た。居ること三年にして履朝し、大阪府立高津中学校の教諭となり大阪に留まつた。此際に僕は君を知ることのであらう。当時僕が藤沢氏泊園書院にて講義をしてゐるのを聴きに來ていられたのを見出す。然し君の志は大陸にあつたから一年にして朝鮮に渡り、京城大学法文学部に助

手となり素野藤塚郷教授の指導を受くことゝなつた。その間の研究の片鱗は「清鮮學人の佳話」として「朝鮮」第二百十三号に見られる。居ること又三年にして南滿洲鐵道株式会社に入り大連又奉天の図書館に勤務した。滿鉄図書館の漸く活躍する時に當つてゐるので君の努力も尋常ならざるものがあるつたようである。滿鉄図書館の報告雜誌たる奉天の「收書月報」だの大連の「書香」だのが学界の注目受くるに至つたが、先生の筆になる紹介報告論文も續々と掲載されて先生が單なる図書館の事務員以上の人であることを示している。地方志研究は滿洲を主題として創始の榮を世に認められた。自らも滿洲方志総目提要の完成を期していた中華文化交流の研究には明の華越の朝鮮賦に力を盡して數次の發表がある。漢籍分類の方法も四庫全書中心たるべきを論じて学界の是認を得た。先生が序文に於て發したる図書館による中日親善は本論にはいつたわけであつた。滿洲に於ける成績の大概は「滿支典籍攷」、「支那學者の地方的研究」に集録されてゐる。滿鉄図書館の活動に沿つて滿洲学会も結成され、「滿洲學叢刊」、「滿洲學報」などが續々として内地学界を刺激したが、君の協力も大きかつたと推想される。其頃の内地

學者の大陸に遊ぶものは殆んど皆君の應援に與らないものはなく、終に其機を得るに至らなかつた僕は履朝の諸先生から君の噂を聞くのみであつたのは今にして遺憾極まりない。

終戦後は大連に留り、中長鐵路公司、科学研究所、中央図書館上級司書、兼同經濟調査局研究員(人文地理)として勤務し、多年の感慨を残して昭和二十二年二月に引揚げ帰還した。舞鶴に帰着して故郷の家も戦災に遇ひ万巻の蔵書も煙散したるを知つたのであつた。久し振りの父子対面に木州先生は「戦後戦前長別離、相逢帶看二毛滋、壯時顏色今何在、總勝吾音認我兒」の一絶を君に示されたこと云うが、僕も亦來訪を受けた時に同様の感を催うしたものだ。然し幸い君の好學の心は少しの喪えもなく、終戦後の雜談から古本を取出しては僕に見せたものである。

藤沢實城先生の紹介によつて同じ四月から関西大学へ講師として支那文學を講ぜられる事となつてからは同僚として屢々會談するの機を得たが、困苦の現下にも好書の風あるに敬服した。二十三年四月からは三尾高等学校教諭をも兼ね、同校の出版物には君の筆になる趣味ある隨筆が見られた。今年八月には和歌山縣立図書館の臨時事務廳託として縣教育委員會の寄託した和歌山の碩學倉田續實先生の遺書整理を手傳し、其中から泊園の藤沢東嶽先生の遺筆が出てきたと報ぜられ、僕も共に一覽の機を得たと思わしめられたものだ。九月初旬になつて三尾高校でのプリント「寒雨連江夜入吳に就て」

を贈られた。これは先頃我等の靜安學社例會で承つたものだがその熱心を見ざるべきである。

然るに關大も始まつて間もない九月二十七日に経商学部で僕は君が昨二十六日午前一時半急逝と知つたのであるから驚かざるを得なかつた。去年一度輕度の腦溢血はあつたのではあるが、其後の健康さはかゝる早急の變を予想もせしめなかつた。關大への遠路の出講、倉田遺書整理の勗精、それらも考えられるが、君の熱心さから見れば当然であつて余り苦痛とも感じなかつたのでないか。戰禍はかくして君の生涯の結論を余りにも簡單に完結せしめ去つたのだらう。老いたる僕をして君の弔傳を書かしたる如きは世の慘事である。令嬢珪君今京大に東洋史を学ぶ。恩師那波誠野博士は君と旧がある。悲報を得て一詩を贈つて弔せられた。

潛心經史勢多年 凝左奉官司簡篇
戰勝一朝還宿志 風塵孤劍了前緣
歸來授業家鄉學 仰止追聲唐宗賢
驚悼瀟然捐館舍 空留遺篋入九泉
木州先生これに次韻して曰く
已廿餘週知命年 終身事業友陳篇
不料遭週風塵變 空了經綸父子緣
東壁府中常貴聖 西城城裏永師賢
今朝眞得誠野句 吟詠余音遠九泉
一吟の下千萬の感をなさないを得ない不文の僕は次するを得ざるを遺憾とする。
君のヒブリオグラフィイは珪君と共に之を編纂して他日世に遺らうと思つてゐる。

以上の如き弔傳を綴つて本誌へ送つておいたのであるが、發行の遅延している間に令嗣瑠君はアルバイトの多忙に拘らず今春三月立派に京大文学部東洋史学科を卒業し、卒業証書を繰前に供えて報告して、父君の之を見るを得ざるを歎じたが、長く膝下に養育を受けた祖翁の猶お健にしてこの榮を貰せらるゝを喜んだのであつた。然るに、木州先生はこれに安心せられたか何事ぞ日もおまはりない四月九日には溘然として道山に歸せられた。重なる不

本学図書蔵 生田文庫の書入本萬葉集

教授 吉 永 登

生田文庫の藏本といへば、何を措いても天下の孤本、西念寺本類聚名義抄のことに触れる必要があらう。しかしこの名義抄は目下、本学の講師であつた京都大学の渡辺実氏の手で調査がつゞけられているので、万事氏の研究成果に期待して、この度は万葉集の書入本の一二について紹介したいと考える。

山田以文校合書入万葉集傍註

卷一、二、三の三冊が現存しているが、奥書はない。貼紙に「以文」の名が見えるので、或は吉田神社に居つた山田以文の手になるものではないかと考へていたが、鈴鹿三七氏の御示教によつて確かめることが出来た。以文は

幸に直面した令嗣の顔前に僕は弔辭も半ば声を呑んだ。聞けば故將軍は予期せられたのか既に昨秋に辭世の一首を密かに撰じていられたと云う。

不敢无人不怨天 一朝大悟謝塵縁
想起八十年間事 半似浮雲半似煙
本誌發行の遅延を幸いとして之にこの兩事を追記しておく。悲運の令嗣の將來の幸多からんことを切に祈るばかりである。論著目録を附し得なかつたのは僕の罪である。

橋本経亮の後輩で、経亮の遺志をつぎ万葉集傍註の版本を利用し、その傍註を削つた上、元暦校本、大須本等による校異を埋木して校異本万葉集として出版した人である。本書にも同じ元暦校本・大須本などが校合せられているので、或は校異本の草稿ではないかと考へられそうであるが、兩者を比較すれば互に多少の出入があるよう直接の關係は認められない。勿論校異本から轉写したものでないことは明らかで、経亮の影響もあつてこつした校合を行つていたことがやがて校異本の出版ともなつたのであらう。

書入の中で最も興味をひくものは、卷一の初めに添えられた別紙に見える

左の如き一文である。

橋経亮云、寛政十年三月廿日、富山所藏古本万葉集、当時蒲州俵屋何某所藏、懇望展覧……

橋経亮は橋本経亮のことであり、彼が荒木田久老と同道して元暦校本を神戸の俵屋で見たことは有名な話で、佐佐木信綱博士はその時期を寛政十一年三月として居られ、以文の右書入と一年の相違がある。二度も行つたとは考へられないので何れか誤りではあるが、佐佐木博士の説は新村出博士の考証になるもので信すべきであらう。従つて経亮の記憶の誤りか、以文の誤記と見るべきであるが、それにしても二十日の日附だけは新事実で、万葉研究史上貴重な資料と考へる。

服部漱夏書入古万葉集

土佐で出版した本活字本古万葉集に丹念な楷書で書入れられたもので、現に卷一、二、十一、十九、二十の五冊が存している。代匠記、冠辭考、万葉考、玉の小琴、略解等の要領が書入れられて居り、わけても目錄と本文の題詞との照合や、書紀の引用文を原本によつて校合していることなど注意すべきであらう。漱夏は宣長の弟子で、その学問上の業績は明らかでないが、藏書家であつたことは、藏書印譜に名を連ねていることから知られる。家は左京錦小路室町西入にあつて、中川之家と号し、藏書印にもこの号を用い

ている。

本書を一覽して最も興味をひくものは卷二の末尾に記されている次の如き奥書であらう。即ち
文化十三年丙子二月三日夜、会説満

訓

於中川之家 会説一坐 本居大平 長谷川菅緒、城戸千楯、予

とあるのがそれで、予というのには勿論漱夏であり、大平は宣長の養子で和歌山藩に仕えた國学者、千楯は紙魚屋と号した宣長の門人、菅緒は和泉の人で同じく宣長に学んだ人である。文化十三年といへば、大平は六十一、千楯は四十九、他の二人は明かでないが、何れも五十前後であつたらう。還暦を迎えた老大平を中心に、当時としては老人といへべき人々が、或は遠い土地から集つての万葉集輪説は考へるだけでも羨しい限りで、又頭の下がる思いがする。筆者は千楯の書入れのある校異本万葉集を持つて居るが、大平や菅緒の説の見られるところから考へて、恐らく同じ時に持ち寄つたテキストであるらう。生田文庫には別に衣川廣滋の書入れた校異本がある。それは大平の本を轉写したものであつて、直接ではないにしても、これで当時集つた四人の中、菅緒を除いた三人のテキストが揃うのも奇縁といへべきであらう。

關西大學圖書館新着洋書目錄 (II)

(終戦後発行図書)

- Pigou, A. C.: Lapses from full employment. Lond., 1949.
- Wilson, T.: Fluctuations in income and employment. 3rd ed. Lond. 1949.
- Lerner, A. P.: The economics of control; principles of welfare economics. N. Y. 1947.
- Meade, J. E.: Planning and the price mechanism. Lond. 1948.
- Harrod, R. F.: International economics. Lond. 1948.
- Stigler, G. J.: The theory of price. N.Y. 1949.
- Hayek, F. A.: The road to serfdom. (Abridged edition) Lond. 1946.
- Patterson, E. M.: An introduction to world-economics. N. Y. 1948.
- Hickman, G. A.: World economic problems; nationalism, technology and cultural lag. N. Y. 1947.
- Pigou, A. C.: Employment and equilibrium. 2d (rev.) ed. Lond. 1949.
- Balzak, S. S., etc.: Economic geography of the USSR. Tr. by R. M. Hankin and O. A. Tetelbaum. N. Y. 1949.
- Lyashchenko, P. I.: History of the national economy of Russia to the 1917 revolution. Tr. by L. M. Hermann. N. Y. 1949.
- Williams, K. P.: The mathematical theory of finance. Rev. ed. N. Y. 1948.
- Peterson, J. M. and Cawthorne, D. R.: Money and banking. Rev. ed. N. Y. 1949.
- Whittlesey, C. R.: Principles and practices of money and banking. N. Y. 1949.
- Whittlesey, C. R.: National interest and international cartels. N. Y. 1946.
- Public finance. Sociology. Commerce.**
- Taylor, P. E.: The economics of public finance. N. Y. 1949.
- Rhodes, E. C.: Elementary statistical methods. Lond. 1948.
- Bogardus, E. S.: Sociology. 3d ed. 1949.
- Gillin, J. L. and Gillin, J. P.: Cultural sociology; a revision of An introduction to sociology. N. Y. 1948.
- Boas, F.: Race, language and culture. N. Y. 1949.
- Bellamy, E.: Looking backward, 2000-1887. Cleveland 1946.
- Lewin, K.: Resolving social conflicts. N.Y. 1948
- Murry, J. M.: The free society. Lond. 1948.
- Owen, R.: A new view of society, and other writings. Lond. 1949.
- Lester, R. A.: Economics of labor. N. Y. 1949.
- Anshen, M.: An introduction to business. Rev. ed. N. Y. 1949.
- Teall, E. N.: Modern business encyclopedia. Cleveland 1945.
- Wilcox, C.: A charter for world trade. N. Y. 1949.
- Paton, W. A.: Essentials of accounting. Rev. ed. N. Y. 1949.
- Language. Literature.**
- Barnhard, C. L.: The American college dictionary. N. Y. 1949.
- Hornby, A. S.: Gatenby, E. V.; Wakefield, H.: A learner's dictionary of current English. Lond. 1948.
- Macmillan's modern dictionary. Rev. ed. Comp. and ed. by B. Overton. N. Y. 1947.
- Webster's students dictionary. N. Y. 1945.
- Roget, P. M.: Thesaurus of English words and phrases. Enlarged by J. L. Roget, new ed. rev. and enl. by S. R. Roget. Cleveland
- Devlin, J.: A dictionary of synonyms and antonyms and 5,000 words most often mispronounced. Cleveland 1946.
- Nesfield, J. C.: English grammar past and present. Revised (1944) Lond. 1948.
- Mueller, C. E.: Philosophy of literature. N. Y. 1948.
- Wood, C.: Poets' handbook. Cleveland 1946.
- Nathan, G. J.: World's great Plays. Cleveland 1944.
- Smith, H.: Columbia dictionary of modern European literature. N. Y. 1947.
- Sampson, G.: The concise Cambridge history of English literature. Cambridge 1949.
- Evans, B. I.: English literature between the wars. Lond. 1949.
- Church, R.: British authors; a 20th century gallery with 53 portraits. Lond. 1948.
- Spiller, R. E., etc.: Literary history of the United States. Vol. 1-3. N. Y. 1949.
- Van Doren, C.: The American novel, 1789-1939. N. Y. 1949.
- Beach, J. W., etc.: American fiction, 1920-1940. N. Y. 1948.
- Harrison, G. B.: Introducing Shakespeare. Lond. 1948.
- Maugham, W. S.: Ashenden, or The British agent. Cleveland 1947.
- Buck, P. S.: A house divided. Cleveland 1948.
- Buck, P. S.: Other gods, an American legend. Cleveland 1947.
- Buck, P. S.: Sons. Cleveland 1948.

關西大學國文學會編集
季刊 國文學

創刊號

定價七十円
送料六円

「怨ぶ」と「忍ぶ」……
築前志賀白水郎歌十首異見
古事記に於ける出雲關係記載の一考察
和名類聚抄二十卷本の原形
袖中抄における万葉語の研究
——特にその方法論的考察——
建礼門院右京大夫考I……
西鶴の説話とアーチ形アロット

第二号 (八月刊行豫定)

顯原博士紀念 近世文學研究號

(執筆者) 暉峻康隆 中村俊定 西山隆二 野間光辰 山崎喜好
横山正一 飯田正一 金子又兵衛 小島吉雄 田中義真
吉永孝雄

大阪府吹田市千里山(關西大学内)
關西大學國文學會
發賣所 大阪市大淀区 長柄中通 紅帆社

關西大學人文科學研究所編集

人文科學論集

各号定價一〇〇円
送料 料一二円

關西大學教授、助教の研究成果を發表せる機關誌で従前「關西大學研究論集」として刊行してゐたものを昭和二十四年七月より復刊したものである
第一號 第二號 第三號 第四號 既刊

一、バックナンバーは取揃えてありますから御入用の向は左記發行所へ直接御注文下さい

大阪府吹田市千里山十七番地(關西大学内)
編集及發行所 關西大學人文科學研究所

關西大學學報 第三三號 (昭和二十五年七月十五日發行)

關西大學教授 植田重正 著

刑法要説 (總論)

定價A 5
三三四
三五〇
三〇〇
四

關西大學教授 松原藤由 著

工業經濟概説 上卷

定價A 5
三二二
三五八
二〇〇
四

關西大學文學會編

日本文學新選

定價A 5
一一一
三八〇
三〇〇
四

關西大學教授 加藤由治郎 著

哲學的論理學

定價B 6
二二七
三五〇
四

關西大學教授 賀屋俊雄 著

海上賣買と基本貿易實務 (CIF賣買其他の英法解釋)

定價A 5
二二三
三五〇
四

(COLLEGE LIBRARY)

關西大學教授 八島治一 著

College English Grammar (高等英文法)

B 6P. 200
クローズ上巻
¥ 150

關西大學教授 八島治一 編

College Readings

B 6P. 150
クローズ上巻
¥ 135

關西大學教授 八島治一 編

Advanced Readings

B 6P. 140
¥ 125

關西大學教授 八島治一 編

Tales From Shakespeare

B 6P. 180
クローズ上巻
¥ 135

Wilhelm Hauff 前田敏作 編

DIE KARAWANE

B 6版P. 97
¥ 100

紅帆社 大阪大市淀長柄中通二 電話 壱一七〇番